

一般教育としての舞踊の見直し —アメリカの大学における舞踊授業—

佐藤俊子

目的：1990年代、急速に進行した日本の大学における「一般教養教育無用論」に抗しつつ、なおかつ日本の大学の一般教養科目の一つとして舞踊を導入することの意義の確認とすすめ。

方法：筆者の日本とアメリカにおける舞踊体験を軸に、最近のアメリカの大学における舞踊の一般教養へのめざましい進出ぶりを紹介しながら、上述の目的を論述したい。

1) アメリカはDOERの国

ヨーロッパの旧体制から押し出された、あるいはその旧体制をみずから捨てた人びとの国、自分たちの希望の天地としてアメリカを選んだ人びとの国、それがアメリカである。過去の遺産にもその重圧にも無縁な自由な空間で、ひたすら未来からの手招きだけを道しるべとし、自己の知力と体力を唯一の頼みとして奮闘努力することを運命づけられているアメリカ人は必然的にDOER（行動の人）であり、PERFORMER（演ずる人）であって、観客でも批評家でもない。

その上、過去の歴史も気楽な前例もない荒野に向ってのあくなき挑戦がアメリカ人にとっての日常であるならば、個人の創造的精神こそがアメリカ人の暮しの武器であろう。日本人のように、たえず周囲を気にしながら、和の精神をもって生きるなどという芸当は所詮できない相談なのである。創造的なDOERになること、創造的なPERFORMERになることこそ、新大陸で生き抜くための条件である。そこにPERFORMING ARTSなくなく舞踊の発展の原動力があるのだと思う。

2) アメリカは大衆型教育大国

新たな未開の大地に、かつてジェファーソンが言ったように「人類最高の希望」をかかげて出発したアメリカに、その自由と平等の理想を実現するためには、万人に開かれた教育、大衆型の大学が必要である。事実、アメリカの大学は国籍を問わず、人種を問わず、年齢を問わず、過去の経歴を問わず、それぞれの才能を生かすチャンスを一度ならず何度でも与えてくれる。ヨーロッパの大学に残るエリート主義も気取りもなく、必要とあれば、どんな新しい科目も新しい学位も作り出す。舞踊学部なるものを真先に創設したのもアメリカ——とりわけヨーロッパに遠い西部であったし、

生涯教育学部では大学のキャンパスに子供のためのダンス教室を常設したり、休暇中には舞踊学部とは別にバレエやモダンダンスのクラスを作り、1回5ドル程度で一般に公開したりもする。

3) 舞踊教育

DOERの国、教育大国アメリカで、舞踊は全人教育として、またまぎれもない芸術として、誰もが認めている。とりわけ1970年代以降の人間主義復興の波に乗って、一層その勢いを増している。

今日の急速な科学の進歩、それにもまさる急速な社会の変化に追いつき、対応できる人間の育成は大学の急務であり、そのためには専門教育の重要性は言うに及ばず、改めて専門教育重視の傾向故に阻害されている一般教養教育こそ見直されなければならないと思う。

一方、舞踊を志さず若者たちの間にも、単なる技術的トレーニングだけではあきならず、リベラル・アーツの一環として、高等教育を身につけながら技術も身につけたいという欲求が高まってきた。振付師の側にも17歳の若さよりも人間として成熟した年代のダンサーを選びたいという願いも現われている。怪我なく、長く踊る方法も熱心に研究されはじめた。さらに加えて、歴史学者や文化人類学者や哲学者らがやはり人間主義の視点から、舞踊に注目しはじめた。このことは当然、大学における舞踊研究を促進した。

結論：今日では誰もが気づき、誰もが言っていることであるが、日本には経済成長の極においてなお、一つのバレエ劇場も、その前提たるべき正規の舞踊学校もなく、大学の一般教養のカリキュラムとして舞踊が進出することも容易ではない。

しかし、芸術も大衆社会に生き残るためには大衆化が必要なのであり、バレエといえども王様や貴族の独占物であったような時代のパターンは望むべきではないだろう。とすれば、舞踊をもっと普通の市民の手の届きやすいところに移し、舞踊を志すパーフォーマーにも、研究家にも、他の専門分野の研究にも役立つ教育機関、とりわけ大学においてもっと見直され、研究され、普及されるべきだと思う。